日本木管、管打、アジアの3つのコンクールで示した抜群の安定感。

竹山 愛

毎年のように開かれるフルートのコンクール。上位入賞者には、順位の変動はあってもほぼ同じ顔ぶれが並ぶ。まるでスポーツのワールドカップの結果を見るような気もしてくるが、そんな中で昨年の国内「総合1位」を選ぶとすれば、文句なしにこの人だろう。

08年秋に行われた日本木管コンクール1位に始まり、昨年11月の第26回日本管打楽器コンクール1位、その直後の12月に韓国のソウルで開かれた第1回アジア・フルートコンクールでは、日本人最高位となる2位（1位は中国人で北京中央音楽院付属高校のMuhao Yu氏）。抜群の安定した実力が注目を浴びている。

初めての開催となったアジア・フルートコンクールについて竹山さんは、

「3次予選は大学の図書室、本選は朝9時半から始まるなどコンクール環境としては予想外のことが多かったのですが、中国や韓国の人たちのパワフルな演奏も聴けて参加してやはり良かったと思いました」

昨年の日本管打楽器コンクールについては、

「入賞者特別演奏会で念願のオーケストラと共演出来て嬉しかったです。

2次の自由曲ではガンヌの《アンダンテとスケルツォ》を選曲したことが意外に思われたようですが、他の2曲との流れを意識して選びました。モーツァルトのコンチェルト1番の第2楽章では語りを基調とした歌を、吉松隆のデジタルバードではメリハリとパワー、奇妙な鳥の姿を、そして、もはや中学生でも問題なく吹けるであろう自由曲を中高生では表現できないような大人の音楽を目標に、フルートらしく自然に歌うよう心掛けました。審査員の先生に『ガンヌに驚いたよ！あんな風に吹くとは…隠れた名曲だね！』と言っていただいたのが本当に嬉しかったですね。

得意なレパートリーですか？　残念ながらコレといって自信を持って言い切れるものがまだないんです。課題曲で演奏する機会が多いジョリヴェのコンチェルトはかなりやった気がしていますが、毎回試行錯誤の繰り返しです」

現在は東京藝術大学大学院2年に在学。もう1年学生を続け「そろそろオーケストラの勉強もしたい」と言う。

「いろんな作品に触れられるのはやっぱりオーケストラですし、オペラにも興味がありますね」

フルートの木ノ脇道元と作曲家の中川統雄がプロデュースし、竹山さんもフルートと歌で参加しているユニットのCD『Cockroach Eater Perfect World』。「電子音と生楽器、クラシックと現代音楽、ポップミュージック、音楽と美術、様々な要素が寄っ怪に絡み合う迷宮的世界」（木ノ脇氏）。ぬらりひょんレコードでネット販売中。

吹奏楽が盛んな千葉県習志野市生まれ。小学校5年のときに吹奏楽部でフルートをはじめ、中学、高校（習志野高校）とも吹奏楽の部活に熱心だった。

「合奏やアンサンブルをするのが好きで、ソロのレパートリーはコンクール以外は殆どやっていませんでした」

最初は指導に来ていた地元の楽器店の人に手ほどきを受け、中学に入ってから、近くに住んでいた元東京フィルの糸井正博氏の下に通う。高校3年のときに三上明子氏にも師事し、現役で東京藝大へ入学。

「大学に入って初めて勉強の仕方が分かったと言うか、考え方も演奏も何もかもが変わりました。入学したての頃は周りのレベルと個性にただ圧倒される毎日で、サファリパークに放り込まれたような気持ち（笑）。そんな刺激的な先輩や友人達に出会え、金先生はじめ素晴らしい先生方に教えて頂いたからこそ今の私がある、と感謝の気持ちで一杯です」

「得意と言い切れるものはない」という竹山さんだが、現代作品を「苦と思ったことはほとんどない」そうだ。

「大学に入るまでは〈聴かず嫌い〉だったのですが、木ノ脇道元先生の《Blower》というCDで中川統雄さんの《Dark Matter》に出会い、これフルート？　何の音？　声出すの？　この世界観は何？　フルートってこんなことも出来ちゃうんだ！　と強烈な印象を受けたんです。以来私の世界が変わり、インスピレーションが湧くような現代作品には自分からどんどん手を伸ばすようになりました」

と言いながら1枚のCDを取り出した（上のCD参照）。

「いま、木ノ脇先生と中川統雄さんの、こんなユニットに参加させてもらっています。電子音楽と生演奏。私、このなかで歌も歌ってるんですよ。ヘンリー・パーセルのアリアをレゲエ調で（笑）。大学に入った頃、自分でバンド組んだりポップスっぽいものを書いたりもしていました。クラシックよりそっちの方が好きだったかも（笑）」

昨年の第26回日本管打楽器コンクール特別演奏会でジョリヴェのフルート協奏曲を演奏する竹山さん。

今月の顔 zoom up

Ai Takeyama

サウンドが過激に変調されたギンギンにサイケデリック調のこのCDと竹山さんのイメージがつながらない人は、多いかも知れない。

左の写真で手にしている楽器は三響の14金（キーは銀）。昨年7月に変えたという。

「ソロにもアンサンブルにも対応できて音が明るく立つような楽器を探していたら、やっと出会ったのがこの楽器。音の変化をつけやすく、私の歌を自分が思った通りに細部まで表現してくれるところが大好きです」

使ってまだ半年だが、管打コンもアジア・フルートコンクールも一緒に勝ち取った大事なパートナーである。

「大学2年で一時スランプに落ち込んだとき、木ノ脇先生に誘われて観た舞踏の舞台が、私には一つの転機になりました。アーティストの空間の作り方や存在感に圧倒され、私もあんな表現者になりたいと思うようになったら、前が開けたんです」